

# 鷗外・『津下四郎左衛門』論考

山崎一穎

## 序

『津下四郎左衛門』は、大正四年四月一日発行の「中央公論」(第三十年第四号)に掲載され、後、追記を加えて『山房札記』(注1)に収録された史伝小説である。

『渋江抽斎』以下の史伝小説の様式をなすこの作品を分析する事によって、(一)作品成立過程、(二)様式の構造、(三)モチーフからテーマへ、(四)鷗外文学におけるテーマの持つ意味等について考察したい。

## (一)

日記によると、大正四年二月二十六日の条に「津下四郎左衛門の稿を起す。」とあり、三月四日に「津下四郎左衛門を書き畢る。……志水小一郎に横井平四郎の事を聞く。」とある。そして、同月十日「津下四郎左衛門の稿本を滝田哲太郎に交付す。」とある。鷗外がこの稿を起すことになった事情について、自ら小説の末尾に、

大正二年十月十三日に、津下君は突然私の家を尋ねて父四郎左衛門の事を話した。聞書は話の殆其儘である。君は私に書き直させよ

鷗外・『津下四郎左衛門』論考

うとしたが、私は君の肺腑から流れ出た語の権威を尊重して、殆其儘これを公にする。只物語の時と所とについて、杉孫七郎、青木梅三郎、中岡黙、徳富猪一郎、志水小一郎、山辺丈夫の諸君に質して、二三の補正を加へただけである。

と附記している。因に大正二年十月十三日付の日記をみると、「津下正高来て、父四郎が事に関する書類を托す。横井平四郎を刺しし一人なり。」とある。「書類を托す」という点に注意したい。更に附記に「二三の補正を加へただけ」という点に関しても、日記並びに『津下文書』(注2)の書簡等を閲すると、

大正二年十月十三日 津下正高来て、父四郎が事に関する書類を托す。横井平四郎を刺しし一人なり。

大正四年二月二十四日 中岡黙(元園町)を訪ひて伊木隊の事を質す。

二十六日 津下四郎左衛門の稿を起す。

三月一日 杉梅三郎、長井行、中岡黙に書状を遣る。

△中岡黙の1日附の返信。V

三日 山辺丈夫に書を寄す。

四日 津下四郎左衛門を書き畢る。……志水小一郎

に横井平四郎の事を聞く。△杉梅三郎から四日付の返信。V

五日 △杉梅三郎からの来信。……文面は先日の回

答を鎌倉の老父に尋ね、それを同封する旨の記載。V

八日 徳富猪一郎を国民新聞社に訪ふ。

十日 津下四郎左衛門の稿本を滝田哲太郎に交付す。

十六日 (天寵を書き畢る。)

四月 一日 (雁を書き畢り糸山仁三郎に通知す。)

五日 (雁を糸山仁三郎に付す。)

六日 中幸男(河内)の書を得て答ふ。(『津下文書』により確認。)

十五日 尾佐竹猛、北原隆吉、三樹一平に書を遣る。

尾佐竹は津下四郎左衛門の事に関する遺聞を知れりと云ふ。

十八日 △津下正高から鷗外に感謝の手紙来る。V

二十日 津下正高、大島正徳(文科大学)に書を遣る。

五月 五日 (応制の詩草成る。)

十二日 (横川徳郎の書を獲て応制の詩略定まる。)

十四日 (二人の友を書き畢りて北原隆吉に送寄す。

応制の詩を書す。)

二十七日 津下正高来訪す。

二十八日 頼原修一郎来て津下正高の事を言ふ。津下の事を菅野尚一に言ふ。

三十日 津下正高、尾佐竹猛を伴ひて至る。

六月 三日 倉知伊右衛門(尾張岩崎)に返書を遣る。津下四郎の事に関する往復なり。広川松五郎来局す。津下正高来局す。

四日 (文求堂に往きて温飛卿集を買ふ。……『魚玄機』執筆のため。……山崎注記)

七日 倉知伊右衛門の書を得てこれに復す。

九日 津下正高来別す。

某日 △十日付の書状を倉知伊右衛門から得る。V  
十二日 頼原修一郎の書を得て之に復す。

七月 某日 △三日付の薫子に関する書状を御牧基賢から得る。V

五日 倉知伊右衛門に書状を遣る。……(六月十日付の書状の返信か。……山崎注記)

七日 (魚玄機を艸し畢る。)

八日 (魚玄機を滝田哲太郎に交付す。)

十八日 (『韶齋』と題する七言律詩成る)

二十五日 (余興を艸して北原白秋に寄す。)

八月 某 日 八六日付の書を津下正高から得る。……三宅

武彦から津下正高宛の七月二十二日付の書簡を同封。……山崎注記V

\* 八 V内の事柄は『津下文書』により確認。

大正八年十一月十八日 八『山房札記』春陽堂より刊行。V

以上の如くである。それ故「聞書は話の殆其儘で」あり、「二三の補正を加へただけである」との鷗外の言葉をそのまま肯定するわけにはゆかない。(注3)常に調査を怠らない鷗外にしても、刊本の参考資料を手許に置き、更に多岐に渡る調査は異例に属する事だと言ってよいだろう。

いよく小説執筆にあたって鷗外は津下四郎左衛門造型においては、正高氏から托された『書類』並びに知友からの聞書、『津下文書』が使われたと思われる。(注4)一方横井小楠造型に関して、第一義資料として『小楠遺稿』(注5)中の小楠先生伝Vにより、漢詩文は同書の小楠堂詩草Vによっている。そして、副次資料として『続再夢紀事』(注6)『肥後藩国事史料』(注7)を補強に用いている。

鷗外はこれらの材源を如何に小説へとディフォルメしていったのであろうか。津下四郎左衛門造型の場合を検討してみよう。

④ 四郎左衛門の家族関係に関する叙述は、『書類』を中心として、正高氏からの聞書であろう。

⑤ 四郎左衛門の周辺に関しては、いわゆる『津下文書』が用いられている。

今実例を一二挙げてみよう。中岡黙宛に「拝啓先日ハ御話承り奉謝候

鷗外・『津下四郎左衛門』論考

其中ハ勇戦隊モ義戦隊モヒガシ山セウリン寺ニ宿營サセタVト被仰候右ハ岡山ノ寺ト存ジ地誌一見候ヘドモ見当ラズ地名、寺号文字此余白へ御記入被下度願上候」(大正四年三月一日、万年筆・黒インク)と、照会した返信に「備前国上道郡国富村操山(山ノ名)少林寺」(毛筆・黒)であるとの回答を得ている。又、三月三日付の山辺丈夫宛の書簡(万年筆・黒)によると、

拝啓益御清廉奉賀候陳バ先頃承候明治二年横井平四郎暗殺ノ折ノ事ニ就キ左ノ件々御記憶有之候ハゞ御教示被下度願上候

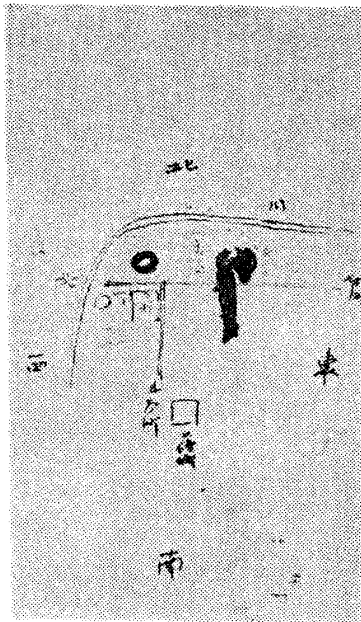
一、寺町ハ南北ニ長キ町ナルガ事変ノアリシハドノ辺ナリシカ

二、当時ノ太政官ハ御所内ニアリシカ又イヅレナリシカ、横井の賀

籠ハ寺町ヨリ南へ通りカカリシト思フ、イカゞ

三、丸太町ニアリシ四條隆調ノ役所(先頃御話ニ承候)ノ名ハ何局

ナリシカ



\* 丸太町は山辺丈夫氏記入。(毛筆・黒)

以上の三箇条について尋ねている。山辺氏は、

一事変ノアリ場所ハ確乎ト分ラザレドモ○印ノ辺ナラント思フ

二 当時ノ太政官ハ御所内ト思フ我々ハ常々公卿御門ノ警護ノ任ニ当

リ大久保木戸諸公ガ常々出入セルヲ看タリ

三 四条公ノ役所ハ丸太町ノ軍務局ナリシナラン我々兵隊ノ拜謁スルヲ得ルハ此軍務局ナリシ目下裁判所トナリタル由

と記るし、(ポールペン・黒)更に鷗外の書簡の地図に○印を付して復している。

なお四郎左衛門の同志等の輪郭の素描は、『肥後藩国事史料』に依っている。

次に横井小楠造型について探ってみよう。

④ (開国は避くべからざる事であつた。……智慧のあるものはそれを知つてゐた。横井平四郎は最も早くそれを知つた一人である。)

嘗て家兄時明重病を受く先生平日友愛太た深し昼夜看護す是より先き先生既に漢法医の治方に嫌足せず医福間某なる者あり曾て業を蘭人に受く先生之れと交る因て治療を托す其治術の条理有るか為めなり先生の門下に来往する者皆洋法に販す而して西洋医術に志有る者為めに大に力を得たり是を以て漢法医輩も亦実学派を忌むに至れり。

△小楠先生伝V五頁

弘化四年に横井の兄が病氣になつた。横井は福間某と云ふ蘭法医に治療を託した。当時元田永孚などと交つて、塾を開いて程朱の学を教へてゐた横井が、肉身の兄の病氣を治療してもらふ段になると、ヨオロッパの医術にたよつた。横井が三十九歳の時の事である。

△小説『津下四郎左衛門』V

⑤ 雖<sub>レ</sub>我有<sub>三</sub>三教、人心無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>繫、神仏良荒唐、儒亦落<sub>三</sub>文芸、政道与<sub>三</sub>放法、贖贖見<sub>三</sub>其弊、洋夷交進<sub>レ</sub>港、必以<sub>三</sub>貨利<sub>二</sub>曳、人心溺<sub>三</sub>異教、難<sub>レ</sub>禁是其勢、西洋有<sub>三</sub>正教、其教本<sub>三</sub>上帝、戒律以<sub>レ</sub>導<sub>レ</sub>人、勸<sub>レ</sub>善懲<sub>三</sub>惡戾、上下信<sub>三</sub>奉之、因<sub>レ</sub>教立<sub>三</sub>法制、治教不<sub>三</sub>相離、是以人奮<sub>レ</sub>勵、

△小楠堂詩草V五四三頁

横井は又ヨオロッパやアメリカで基督教が、人心を統一する上に於いて頗る有力であるのを見て、神儒仏三教の不振を歎いた。西洋有正教。其教本上帝。戒律以導人。勸善懲惡戾。上下信奉之。因教立法制。治教不相離。是以人奮勵。

△小説『津下四郎左衛門』V

⑥ 江戸遭難のことは、『続再夢紀事』の卷三(三〇七頁、三一〇頁)を中心に『肥後藩国事史料』所収の△横井平四郎関係書類V(二五六頁)、『小楠遺稿』中の△小楠先生伝V(二五頁)等で補正している。

このように小楠造型にあたっては、ほぼ材源の文章の要約であるが、

⑦ ⑧ ⑨ の三つのパターンがみられる。すなわち、

① 鷗外の独自の解釈(括弧で括った文)を加えて、材源の原文の要約。

② 材源の原文を要約した上で、原文のままの引用。

③ エピソードの記事に関しては、一つの材源を基本として、他の材源を比較して校勘。

という方法である。いづれにしても、時や所は明瞭に押えている。

そして、三月十日に滝田氏に渡した原稿が四月一日発行の「中央公論」に掲載されるや、各方面から鷗外の許に書簡が齎されたのである。

その手翰をもとに、雑誌に手を入れたものが、(Gペン・赤)『山房札記』の本文となったのである。今、誤字の訂正を除いて、本文の異同のみを列挙しておきたい。

★四郎左衛門は土屋信雄と變名して、京都の片田舎の主宅某と云ふもの  
粟田白川橋南に入る 堤町の三宅典膳  
 の家に潜伏してゐた。(『中央公論』一〇頁、『山房札記』三四六頁、

岩波版第二次『鷗外全集』四七頁)

★寺町を御霊社の前に差し掛かった。(一一頁、三四九頁、四九頁)  
南まで来

★刀の血を道傍の小河で洗つて鞘に納め、ゆくり歩いて座敷を借りて、  
それから道を転じて嵯峨の三宅左近の家をさして行った。  
 左近は四郎左衛門が三宅典膳の家で相談になった剣客である。  
 本主宅方へ帰つた。三宅方の裏には小さい酒屋があつた。四郎左衛門はそこで……竹藪の中にある主宅方の裏から這入つた。主宅方

家には、四郎左衛門が……(一四頁・三五三頁・五二頁)(注8)

★明治三年に津塚の露と津えたと云ふ……(一七頁、三五九頁、五六頁)  
十月十日に斬られた

★今一人は後に岡山の典獄に本つてゐる主宅某君である。……其妻は遺  
久しく家に  
 蔵匿せしめて置いた三宅氏の後たる武彦君である。  
 物の徳利にまで及んだ。(二〇頁、三六三頁、五九頁)

(I)

次に小説の構造について焦点を当ててみよう。

- ①
- (a) 津下四郎左衛門は私の父
  - (b) 父は横井小楠を刺殺。
  - (c) 世間の人は父を知らぬが、小楠先生は存知。
  - (d) 横井氏が慶祥ある家に対し、津下氏は殃咎ある家。その事を歎嘆。
  - (e) このような経緯を説明して、父の雪冤を成就。

- ②
- (a) 幕末には尊王に攘夷が、佐幕に開国が附帯して唱道。
  - (b) 本来別々のものであるが、群衆心理上から合致。
  - (c) 歴史の必然は開国。——智者はそれを認識して秘していたので、群衆心理へ不浸透。
  - (d) 外国文化の優秀性を智者は認識。——小楠は早く認識していた一人。……父は無理解。

- ③
- (a) 小楠は兄の病氣治療をヨーロッパ医学に依存。
  - (b) 兵器とその技術の優秀性の認知の一例。
  - (c) 松陰、海舟との交遊。姪を米国へ遊学。

(a) 智者は尊王佐幕両派に存在。——尊王派は多数を制するため、その知恵を晦ますことに努力。その例。

\* 岩倉具視と玉松操との物語。

\* 多数が愚ゆえ、秘密保持が完全に遂行。

(b) 父が愚であつたことを承認。——弁護のために理由を列挙。

\* 若年。

\* 身分低級。

- ④
- (a) 父が小楠を刺殺した時、小楠六十一歳で参与。……父は二十三歳で浮浪の青年。
  - (b) 小楠は細川家の奉行職の家に出生。……父は岡山在の里正の子。
- ⑤
- (a) 人の知恵は年令や知者に遭遇することによって発達。
  - (b) 父が時勢を洞察できなかったのは身分が低級故。
- ⑥
- (a) 私の家は代々備前国上道郡浮田村の里正。  
 津下四郎左衛門
  - (b) 分家 = 津下千代  
 四郎左衛門(私の父。)

①

- (c) \* 父は嘉永元年出生。幼名鹿太。  
\* 津下鹿太 丈 V 婚礼。
- (d) \* 鹿太は「黒舟」の噂の中で成長。  
\* 当時は、正義の人 II 尊王攘夷派・因循の人 II 佐幕開国派。  
\* 鹿太は成長して正義の人になりたいと願望。
- (e) 文久二年鹿太は十五歳で元服。名告は正義。
- (f) \* 丈と眞の夫婦。

- (g) \* 阿部守衛の弟子として撃剣の修業。  
文久三年、私が発生。

- (a) \* 慶応三年、大政奉還。

- \* 岡山藩主の家老に伊木若狭という尊王家有。
- \* 明治元年七月、伊木が備中越前鎮撫総督を拝命。
- (b) \* 伊木の隊卒不足の為勇戦隊を募集。  
\* 四郎左衛門応募したが、身分が低いので排斥。
- (c) \* 勇戦隊岡山より松山に向けて進発。  
\* 道中懇願し、隊に加入。二十一歳。

②

- (d) \* 無血で鎮撫の目的達成。  
\* 備中で義戦隊募集。
- (e) \* 備前・備中組で武芸の試合。  
\* 四郎左衛門活躍。
- (f) \* 六月、両隊岡山に帰還。  
\* 四郎左衛門撃剣を指南。

③

- (a) \* 四郎左衛門義戦隊参謀の上田立夫と親交。  
\* 尊王攘夷を談じて、当時の施政を慷慨。  
\* 議定・参与の人々の開国の下心がようやくやく施政に発露。
- (b) \* 二人は政府の施政を探るため脱藩、上京。  
\* 君側の奸を発見次第排撃しようと決意。  
\* 洋夷に心を傾けるものとして、参与横井小楠を発見。

- (a) \* 小楠は公武合体論者であり、開国論者。

- \* 世間では、廢帝を議し、基督教の公許を目論んでいると曲解。
- (b) \* 誤解の生じた理由。——発表にあたって用意不足。  
\* 共和制の価値を認めて、堯舜の時すでに存在すると主張。

△廢帝の主張と相違 V

④

- \* 神儒仏三教の不振を嘆息。△基督教の公許と相違 V
- \* 小楠は政治上は尊王家で、思想上は儒者。
- \* 当時の尊王攘夷論者の思想は小楠より単純。故に誤解派生。
- (c) \* 以前から小楠は志士達から奸人として注視。  
\* 六年前江戸で刺客に遭遇し、かろうじて逃亡。  
\* その行為が卑怯であったと禄剝奪。

- (a) \* 上田と津下は小楠刺殺を計画。

- \* 四人の同志叫合。

- (b) 津下変名して待つも、小楠病氣にて不出仕。

- (c) 邸内に乱入しようとするが、上田より諫止。

- (d) \* 歳暮に迫って小楠出仕。来春刺殺を決意。

\* 訣別のため帰郷。

⑤

⑥

- (a) \* 四郎左衛門上京中も父から送金。
- \* 同志の会合の費用の支払に充当。
- \* 同志の一人が守銭奴を脅迫して費用念出を提案。
- \* 四郎左衛門反対。

⑦

- (a) 大晦日の雪の夜、杉本某から津下家へ伝言。
- (b) \* 杉本家に行くと、父が「坊主好く来た」と頭を撫でてくれたことを記憶。
- \* 父は未明出立。

⑧

- (a) 明治三年正月五日の午後、小楠の駕籠を襲撃。
- (b) 小楠の護衛等と切り結ぶこと数合。
- (c) \* 小楠悠然と駕籠を出で、佇立。
- \* 七年前は逃げる余裕があったから逃亡。——今日は飽まで闘おうと決意。
- (d) 四郎左衛門と小楠との切合いの様子。
- (e) 同志等の切合いの様子。
- (f) 四郎左衛門と小楠との切合いの様子。——遂に小楠を斬首。
- (g) 四郎左衛門血刀と生首をもって馳走。
- (h) 同志の柳田は負傷して、その場に仆倒。
- (i) 小楠の警護の者四郎左衛門を追走。
- (j) 四郎左衛門は追尾する上野に首を投げ逃走。
- (k) 柳田をのぞく同志それぞれ逃亡。
- (l) \* 警護の人々小楠の遺体を收藏。
- \* 柳田捕縛。

⑨

- (m) \* 四郎左衛門は嵯峨の三宅左近宅へ逃走。
- \* 酒を買って裏門より入室。
- \* 左近方とその徳利が所蔵。
- (a) \* 柳田黙秘。——同志の名しばらく不明。
- \* 柳田と往来のあった者召喚、或る者は入牢。
- (b) \* 四郎左衛門毎日市中に出て、柳田の生死と捕縛された人々の名を詮索。
- \* 柳田の生存確認。同志の名に関して黙秘。——市井の評判。
- \* 多く召喚、入牢した人は尊王攘夷論者。
- \* その人達の名を列举。
- (c) \* 市井の評判は概して同志に同情的。
- \* 事件後同志を庇護する文章辻に掲示。
- (d) 文章の全文。——憂国の至誠より出たる快挙。
- (e) 右の文章は四郎左衛門の剣術の師が公文書から筆写。
- (a) 上田鹿島捕縛。——十四日、四郎左衛門も捕縛。
- (b) \* 十六日柳田死亡。
- \* 勇戦隊の編成者松本入牢。

⑩

- (a) \* 裁判官の中に同志に同情的な雰囲気存在。
- \* 薫子が父放免のため周旋したことを仄聞。
- \* 私にとって、薫子は未知の人。

⑪

(a) \*父は明治三年十月十日に刑死。

\*父の死について母に質問。

\*その敵討をするといつて、山梔の枝を打擲。

\*母はその後父の噂を中止。

(b) \*祖父落胆し、一家も没落の一途。

\*刑余の人の妻子として生活。

(c) \*母は私を学校をやるため苦勞。

\*大学へ入学したが半途で退学。

\*父の雪冤の情熱が、学問に専念することを妨碍。

(d) \*人は学問し名を成すことが、雪冤になると主張。

\*しかし、私の情熱を鎮めるには冷やかな理性が微弱。

(a) \*父は世間が認めて悪人となした人を刺殺。

\*善悪の標準は時と所に従つて変化。

\*当時の悪人を殺した父がなぜ刑死しなければならぬという煩悶

が大学中退の一因。

(a) \*下級官吏として勤務。

\*父の雪冤のため全力を投入。

(b) \*父の行状を知るべく、印した土地を踏破。

\*父の事をいろいろと詳聞。

(c) \*以上の話は私が集めた事実を任意に湊合。

\*父に対する私の予想は正中。——善人、氣節を重じた愛国者、

理想家。

(d) 反面、父が時代を洞察することの出来ぬ昧者であったことを承

認。

(e) \*私は父の上を語ってくれた人々に感謝の意を表明。

\*その例。

(a) \*父の雪冤という事が幼時からの願望。

父を殺した人を殺さなくてはと思念。

\*成長するにしたがつて、父を殺したのは法律だと認識。

\*落胆し、自己の生活が無意味と感して嘆傷。

(b) 亡父を朝廷の恩典に浴させようと奔走。

(c) \*一時問題となるも中止。

\*再び落胆し、生活が無意味になったと嗟歎。

(6) (a) すべてをあきらめ、此話を誰かに書いて後世に残したい一念。

(a) \*文中の「私」は四郎左衛門の子。

\*読者はその子が、どんな性格、境遇や閱歴を経て来たかを熟知。

(1) (b) 私(鷗外)はこの聞書の editeur として、公にされる来歴につ

いて一言。

(a) \*私は君と会った時、君の相貌に *kain* のしるしを認知。

(2) \*三十余年の今日迄君は私に通信を継続。

\*兎に角私は始終君を視野の内に留意。

(a) \*大正二年十月十三日、突然私の所へ来て父の事を言談。それを

殆其儘公表。

(3) \*ただ物語の時と所に就つて、諸氏に質して若干補正。

\*久しくみぬうちに君の昔の憂愁の影は消失。

更に小説の構造を組立て直すと、次のようになる。



「中央公論」（第30年第4号／大正4. 4. 1）掲載

鷗外・『津下四郎左衛門』論考

五、 P. 63(14)  
P. 75(1)  
附記(←)  
〈資料〉

津下四郎左衛門並びに関連資料。『津下文書』による。

\* 頁数は第二次岩波版『鷗外全集』第七巻による。

四、 P. 62(4)－P. 63(12)

附記(←)  
〈鷗外と私との関係〉

- ③ 君の物語る殆其儘を公表。(a)
- ② 君は三十余年の今日迄私の視野の内に存在。(a)
- ① 私（鷗外）津下四郎左衛門の子（正高）との出合。(a)－(b)

三、 P. 56(1)－P. 62(2)

〈語り手（私）の告白〉

- ⑥ あきらめ、この物語を残したい一念。(a)
- ⑤ 父を殺したのは人でなく法律だと認知。――落胆。――贈位の奏請運動失敗。――落胆。(a)－(c)
- ④ 官吏となり、父の事蹟探訪。(a)－(e)
- ③ 父の雪冤の情熱が学業放抛の一因。(a)
- ② 父の刑死。――一家の没落。――私は大学を中退。(a)－(d)
- ① 薫子四郎左衛門放免の周旋。(a)

二、 P. 41(4)－P. 55(15)

〈事件の全貌〉

- ⑩ 同志全員逮捕。(a)－(b)
- ⑨ 逃亡した同志のその後と市井の評判。(a)－(e)
- ⑧ 横井小楠刺殺実行。(a)－(m)
- ⑦ 訣別のため帰郷。(a)－(b)
- ⑤ 横井小楠刺殺の計画。(a)－(d)
- ③ 脱藩。……(a)－(b)……(c)……(d)……(e)……(f)……(g)……(h)……(i)……(j)……(k)……(l)……(m)……(n)……(o)……(p)……(q)……(r)……(s)……(t)……(u)……(v)……(w)……(x)……(y)……(z)……(aa)……(ab)……(ac)……(ad)……(ae)……(af)……(ag)……(ah)……(ai)……(aj)……(ak)……(al)……(am)……(an)……(ao)……(ap)……(aq)……(ar)……(as)……(at)……(au)……(av)……(aw)……(ax)……(ay)……(az)……(ba)……(bb)……(bc)……(bd)……(be)……(bf)……(bg)……(bh)……(bi)……(bj)……(bk)……(bl)……(bm)……(bn)……(bo)……(bp)……(bq)……(br)……(bs)……(bt)……(bu)……(bv)……(bw)……(bx)……(by)……(bz)……(ca)……(cb)……(cc)……(cd)……(ce)……(cf)……(cg)……(ch)……(ci)……(cj)……(ck)……(cl)……(cm)……(cn)……(co)……(cp)……(cq)……(cr)……(cs)……(ct)……(cu)……(cv)……(cw)……(cx)……(cy)……(cz)……(da)……(db)……(dc)……(dd)……(de)……(df)……(dg)……(dh)……(di)……(dj)……(dk)……(dl)……(dm)……(dn)……(do)……(dp)……(dq)……(dr)……(ds)……(dt)……(du)……(dv)……(dw)……(dx)……(dy)……(dz)……(ea)……(eb)……(ec)……(ed)……(ee)……(ef)……(eg)……(eh)……(ei)……(ej)……(ek)……(el)……(em)……(en)……(eo)……(ep)……(eq)……(er)……(es)……(et)……(eu)……(ev)……(ew)……(ex)……(ey)……(ez)……(fa)……(fb)……(fc)……(fd)……(fe)……(ff)……(fg)……(fh)……(fi)……(fj)……(fk)……(fl)……(fm)……(fn)……(fo)……(fp)……(fq)……(fr)……(fs)……(ft)……(fu)……(fv)……(fw)……(fx)……(fy)……(fz)……(ga)……(gb)……(gc)……(gd)……(ge)……(gf)……(gg)……(gh)……(gi)……(gj)……(gk)……(gl)……(gm)……(gn)……(go)……(gp)……(gq)……(gr)……(gs)……(gt)……(gu)……(gv)……(gw)……(gx)……(gy)……(gz)……(ha)……(hb)……(hc)……(hd)……(he)……(hf)……(hg)……(hh)……(hi)……(hj)……(hk)……(hl)……(hm)……(hn)……(ho)……(hp)……(hq)……(hr)……(hs)……(ht)……(hu)……(hv)……(hw)……(hx)……(hy)……(hz)……(ia)……(ib)……(ic)……(id)……(ie)……(if)……(ig)……(ih)……(ii)……(ij)……(ik)……(il)……(im)……(in)……(io)……(ip)……(iq)……(ir)……(is)……(it)……(iu)……(iv)……(iw)……(ix)……(iy)……(iz)……(ja)……(jb)……(jc)……(jd)……(je)……(jf)……(jg)……(jh)……(ji)……(jj)……(jk)……(jl)……(jm)……(jn)……(jo)……(jp)……(jq)……(jr)……(js)……(jt)……(ju)……(jv)……(jw)……(jx)……(jy)……(jz)……(ka)……(kb)……(kc)……(kd)……(ke)……(kf)……(kg)……(kh)……(ki)……(kj)……(kk)……(kl)……(km)……(kn)……(ko)……(kp)……(kq)……(kr)……(ks)……(kt)……(ku)……(kv)……(kw)……(kx)……(ky)……(kz)……(la)……(lb)……(lc)……(ld)……(le)……(lf)……(lg)……(lh)……(li)……(lj)……(lk)……(ll)……(lm)……(ln)……(lo)……(lp)……(lq)……(lr)……(ls)……(lt)……(lu)……(lv)……(lw)……(lx)……(ly)……(lz)……(ma)……(mb)……(mc)……(md)……(me)……(mf)……(mg)……(mh)……(mi)……(mj)……(mk)……(ml)……(mm)……(mn)……(mo)……(mp)……(mq)……(mr)……(ms)……(mt)……(mu)……(mv)……(mw)……(mx)……(my)……(mz)……(na)……(nb)……(nc)……(nd)……(ne)……(nf)……(ng)……(nh)……(ni)……(nj)……(nk)……(nl)……(nm)……(nn)……(no)……(np)……(nq)……(nr)……(ns)……(nt)……(nu)……(nv)……(nw)……(nx)……(ny)……(nz)……(oa)……(ob)……(oc)……(od)……(oe)……(of)……(og)……(oh)……(oi)……(oj)……(ok)……(ol)……(om)……(on)……(oo)……(op)……(oq)……(or)……(os)……(ot)……(ou)……(ov)……(ow)……(ox)……(oy)……(oz)……(pa)……(pb)……(pc)……(pd)……(pe)……(pf)……(pg)……(ph)……(pi)……(pj)……(pk)……(pl)……(pm)……(pn)……(po)……(pp)……(pq)……(pr)……(ps)……(pt)……(pu)……(pv)……(pw)……(px)……(py)……(pz)……(qa)……(qb)……(qc)……(qd)……(qe)……(qf)……(qg)……(qh)……(qi)……(qj)……(qk)……(ql)……(qm)……(qn)……(qo)……(qp)……(qq)……(qr)……(qs)……(qt)……(qu)……(qv)……(qw)……(qx)……(qy)……(qz)……(ra)……(rb)……(rc)……(rd)……(re)……(rf)……(rg)……(rh)……(ri)……(rj)……(rk)……(rl)……(rm)……(rn)……(ro)……(rp)……(rq)……(rr)……(rs)……(rt)……(ru)……(rv)……(rw)……(rx)……(ry)……(rz)……(sa)……(sb)……(sc)……(sd)……(se)……(sf)……(sg)……(sh)……(si)……(sj)……(sk)……(sl)……(sm)……(sn)……(so)……(sp)……(sq)……(sr)……(ss)……(st)……(su)……(sv)……(sw)……(sx)……(sy)……(sz)……(ta)……(tb)……(tc)……(td)……(te)……(tf)……(tg)……(th)……(ti)……(tj)……(tk)……(tl)……(tm)……(tn)……(to)……(tp)……(tq)……(tr)……(ts)……(tt)……(tu)……(tv)……(tw)……(tx)……(ty)……(tz)……(ua)……(ub)……(uc)……(ud)……(ue)……(uf)……(ug)……(uh)……(ui)……(uj)……(uk)……(ul)……(um)……(un)……(uo)……(up)……(uq)……(ur)……(us)……(ut)……(uu)……(uv)……(uw)……(ux)……(uy)……(uz)……(va)……(vb)……(vc)……(vd)……(ve)……(vf)……(vg)……(vh)……(vi)……(vj)……(vk)……(vl)……(vm)……(vn)……(vo)……(vp)……(vq)……(vr)……(vs)……(vt)……(vu)……(vv)……(vw)……(vx)……(vy)……(vz)……(wa)……(wb)……(wc)……(wd)……(we)……(wf)……(wg)……(wh)……(wi)……(wj)……(wk)……(wl)……(wm)……(wn)……(wo)……(wp)……(wq)……(wr)……(ws)……(wt)……(wu)……(wv)……(ww)……(wx)……(wy)……(wz)……(xa)……(xb)……(xc)……(xd)……(xe)……(xf)……(xg)……(xh)……(xi)……(xj)……(xk)……(xl)……(xm)……(xn)……(xo)……(xp)……(xq)……(xr)……(xs)……(xt)……(xu)……(xv)……(xw)……(xx)……(xy)……(xz)……(ya)……(yb)……(yc)……(yd)……(ye)……(yf)……(yg)……(yh)……(yi)……(yj)……(yk)……(yl)……(ym)……(yn)……(yo)……(yp)……(yq)……(yr)……(ys)……(yt)……(yu)……(yv)……(yw)……(yx)……(yy)……(yz)……(za)……(zb)……(zc)……(zd)……(ze)……(zf)……(zg)……(zh)……(zi)……(zj)……(zk)……(zl)……(zm)……(zn)……(zo)……(zp)……(zq)……(zr)……(zs)……(zt)……(zu)……(zv)……(zw)……(zx)……(zy)……(zz)
- ⑧ 横井小楠刺殺の思想。(a)－(c)
- ④ 横井小楠の思想。(a)－(c)
- ③ 四郎左衛門のプロファイル。(a)

一、 P. 37(1)－P. 41(3)

〈語り手（私）と事件の関連〉

- ⑥ 父が時勢を洞察できなかった理由。(a)－(f)
- ④ 尊王家の智者の時勢の認識。  
開国の必然性を認識しながら、多数が味者故秘密保持可能も味者の一人。
- ② 幕末の状況。  
尊王攘夷・佐幕開国両派の抗争。  
開国の必然性と外国文化の優位性の認識者としての横井小楠。
- ① 横井小楠を刺殺した津下四郎左衛門は私の父。  
尊王攘夷・佐幕開国両派の抗争。  
開国の必然性を認識しながら、多数が味者故秘密保持可能も味者の一人。

最終的にこの小説は、一、△語り手（私）と事件の関連▽、二、△事の全貌▽、三、△語り手（私）の告白▽、四、附記（△）、△鷗外と私の関係▽、五、附記（△）△資料▽という構成から成立している。しかも、五、は四郎左衛門に関する資料の補遺であるが、主として四郎左衛門と交遊のあった人々の事蹟を語っている点に注意したい。

この小説のスタイルについて一瞥すると、一、二、で小説は完結し、三、以下は不要と見える。勿論、一、二、で小説が完結を見るためには、三、を一、の中に融合させる操作が必要になろうが。しかし、鷗外が用いた方法は三、四、五、を附記した形で造型されている。この方法は今までの鷗外の歴史小説作法に見られない独特のものである。すなわち、二、から四郎左衛門像、一、三、を通して息子の正高像、一、から鷗外と四郎左衛門との関連（むしろ歴史的背景）、四、から息子と鷗外との関係、五、四郎左衛門周辺の資料という図式が引ける。つまり、鷗外、四郎左衛門、その息子というトライアングルに注意したい。鷗外の視座は四郎左衛門にもその息子にも注がれ、相方を同時に描くという二重構造をもっている。このスタイルこそ、鷗外の創見にかかわる新しい造型作法である。ただし、この小説のスタイルを詳細に見ると、次の如き欠陥も内包している。

- ① 鷗外—四郎左衛門／鷗外—四郎左衛門の息子という関係が、かならずしも等質でない。つまり、鷗外の比重が息子にかり過ぎている。その点でトライアングルのバランスを欠いていることは否めない。
- ② ①から敷衍できるが、四郎左衛門とその息子が平行的に描かれていて、立体的になってこない。
- ③ 四郎左衛門造型が編年式に描かれていない。
- ④ 五、附記（△）△資料▽の周辺の資料の掲載がかならずしも整理されて

いない。  
当然この欠陥を克服した時に、鷗外の独特の小説のスタイルが完成されるのである。私はそれを『渋江拙斎』だと考えている。今『渋江拙斎』を例にとって考えると、

- ① 鷗外—拙斎—拙斎の息子保との緊密な関係で、トライアングルを成している。
- ② 拙斎像と保像とが立体的に浮びあがって来ている。
- ③ 拙斎の記述が編年体綴られている。
- ④ 鷗外の目は拙斎没後にも及び、家族の形成する生活圏と他のそれとの連鎖の中に人間群像を見事に浮彫にしており、集団を描く方法が見事に定着している。

私はその意味でこの『津下四郎左衛門』のスタイルこそ、『渋江拙斎』の原型を成す点で高く評価したい。

（三）

鷗外がこの小説を描いてみようと思いたった動機は、何であったのだろうか。考察の手掛りとなる叙述は、構成の四、附記（△）△鷗外と私の関係▽部分であろう。弟篤次郎が大学に在籍していた時分、鷗外に紹介した人物として、津下正高に会った時の印象を鷗外は「津下君は色の蒼白い細面の青年で、いつも眉皺を寄せてゐた。私は君の一家の否運が『天』のしるしのやうに、君の相貌の上に見はれてゐたかと思ふ。」と記している。更に「それから後三十年の今に至るまで、津下君は私に通信することを怠らない。」と言ひ、「兎に角私は始終君を視野の外に失はずにゐた。」とも述べている。そして、「大正二年十月十三日に、津下君は突然私の家を尋ねて、父四郎左衛門の事を話した」時の印象を、「久しく見ぬ間に、体格の巖疊な、顔色の晴々した人になってゐて、昔の憂愁の影はもう痕だになかった。」と書き記している。こう見て来ると、吉田

精一氏の「父の冤を雪ぎたい」という津下正高の肺腑から流れた語の権威にうたれたこと」（注9）がこの作品のモチーフであるという見解は、どうも少し違うように思はれる。私は「Kainのしるし」のやうな相貌から、「憂愁の影」が消失し、「顔色の晴々した人」に変貌していった所に正高氏の歴史を見、それに心引かれていった事が、この小説執筆のモチーフであるとみたい。すなわち、相貌の変化は精神の変化でもあるはずで、於菟のために書き与えた「路湿好尋乾処行」という言葉をも、鷗外の精神の中には或る強靱さを評価する気持がある点も見逃してはならないだろう。そして正高氏の「父の冤を雪ぎたい」という熱意と、「三十年の今日まで始終君を視野から失はずにゐた」という鷗外の正高氏に対する愛情が挺となって、父の雪冤の内実へと迫まって行くのである。

そこで、鷗外が津下四郎左衛門をいかなる人物として造型しているのか、という点を考察したい。四郎左衛門は嘉永元年（一八四八）に生れ、「物騒しい世の中で黒船の噂の間に成長」した。当時、尊王攘夷を奉ずる人は「正義」の人、佐幕開国を主張する人は「因循」の人と喧伝されていた時代である。このような環境に育った四郎左衛門は、「早く大きくなりたいと願ふと同時に、早く大きくなって正義の人になりたい」と願った。やがてこの気持は成長すると、尊王家の伊木若狭の勇戦隊志願となり、義戦隊の参謀上田立夫と友人になるに及び、「二人の会話はいつも尊王攘夷の事を談じて慷慨し、所謂万機一新の朝廷の措置も動もすれば因循の形迹が見れ」ることを嘖り、相談の上脱藩し、「秕政の根本を窮めて、君側の奸を発見したら、直ちにこれを除かうと

云ふ企図」をもって京都へ上ったのである。当時二人の目に「奸人の巨魁として映じたのは」横井小楠であった。当時同志の会合の席上で、同志の一人が「かうして津下にはかり金を遣はせては気の毒だ。軍資を募るには手段がある。我々も人真似に守銭奴を脅して見ようではないか」と言ったのに対し、津下は居直って、「我々の交は正義の交である。君国に捧ぐべき身を以て、盜賊にまぎらはいはしい振舞は出来ない。仮に死んでしまふ自分は瑕瑾を顧みぬとしても、父祖の名を汚し、恥を子孫に遺してはならない。」と諫めたというエピソードは津下の人柄を如実に表わしている。そして鷗外の筆は、「人の智慧は年齢と共に發展する。」又、「人の智慧は遭遇によって補足せられる。父は縦しや愚であったにしても、若し智者に親近することが出来たなら、自ら發明する所があったのかも知れない。」と述べ、「遂に consacrés の群に加はることが出来ずに時勢の秘密を覗ひ得なかつたのは」自分の低さと若さ故であると述べている。「時勢を洞察することの出来ぬ味者であった」事を認めつつも、「父は人を殺した。……父は自から認めて悪人となした人を殺したのである。それは父が一人さう認めたのでは無い。当時の世間が一般に悪人だと認めたのだといつても好い」と弁護し、結論として「善人である。気節を重んじた人である。勤王家である。愛国者である。生命財産より貴きものを有していた人である。理想家である」と述べ、落書に見られる如く「憂国之至誠より出でたる」行為として描いている。

一方鷗外の目は、横井小楠をどのように把えているのだろうか。開国の歴史的必然性を洞察し、医学砲術、海事に関し西欧諸国の優秀性を認識し、時代の先駆者勝義邦、吉田松蔭との交友、兄の子の米國遊学等を

通して、歴史の転換期にあつて、その必然性を認識しつつ行動した智者として描いている。公武合体論者であり、開国論者であつた小楠の思想が誤解された点を指摘しつつ、「横井は政治上には尊王家で、思想上には儒者であつた。甘んじて西洋の隷となることを憤つた心は、攘夷家の心と全く同じである。」とさえ言っている。更に江戸において刺客に襲われた時、一人逃亡した事を卑怯であると思なされた事に對しても、「七年前に品川で刺客に背を見せたのは、逃げる余裕があつたから逃げたのである。」と弁護している。

智者横井小楠とそれを刺殺した津下四郎左衛門の両者に鷗外の筆は好意的に働いている点に注意したい。そこにこそ、この作品を解く鍵があるろう。横井小楠を好意的に描く目は、鷗外の歴史への視点を窺い得るのである。既に構成で述べた所を再度押えらると、

- 一
- |  |  |
|--|--|
| <p style="text-align: center;">④</p> <p>(a) 幕末には尊王に攘夷が、佐幕に開国が附帯して唱道。<br/>本来別々のものであるが、群集心理上から合致。</p> <p>(d) 外国文化の優秀性を智者は認識。</p> | <p style="text-align: center;">②</p> <p>(c) 歴史の必然は開国。——智者はそれを認識して秘していたので、群集心理へ不浸透。</p> <p>(a) 智者は尊王佐幕両派に存在。——尊王派は多数を制するたため、その知恵を晦ますことに努力。その例として、<br/>* 岩倉具視と玉松操との物語。<br/>* 多数が愚ゆえ、秘密保持が完全遂行。</p> |
|--|--|

以上の諸点を列挙しよう。そして、この観点こそ、鷗外の幕末の歴史への視座である。一方津下四郎左衛門を好意的に描く目は、鷗外の心情と

結びついてくるのである。行為の善悪はともかく、日本の夜明けに馳せ参じ、自らの信ずる道に専心した四郎左衛門の姿に心ひかれるものがあったであろう。鷗外その人も常に「普請中」の近代日本の形成のために常に警世の木鐸であつた事を思えば、幕末の動乱期に生きた人々に対する興味、共感はとりわけ強かつたであろう事は想像に難くない。黒舟さわぎの頃幼少期を過ごした四郎左衛門は、正義の人となりたいたいという願望止みがたく、同志を得、憂国の士と成長し、君奸と目した横井小楠刺殺を遂げ、二十三歳を一期に刑死した行為は、歴史の必然的な流れから見れば誤つていたと言わなければならぬし、昧者であつたとも言えよう。ただし、その生き方を見れば、二十三歳の生涯の密度は高かつたと言えよう。その密度の高さに鷗外の目は注がれていると言つてよからう。それは単なる弱者に対する同情ではない。自己の目的に向かつて邁進して果てた生き方に、日々の充足感（生命の充実感）を感じたと言つてよからう。これこそ、この作品のテーマであり、生命であると言えよう。

(四)

このテーマは鷗外の生き方、物の考え方と他の作品の上でどう関わってくるのであろうか。『青年』は内的生活の充実という個人主義に出發し、利己的・衝動の赴く所社会問題を惹起せしめて、無政府主義のデカダンスへ新しい青年が陥落する危機を、如何に克服するかという観点からの発想である事は論を須たない。問題は主人公の日記に示されている如く、「生きる。生活する。答は簡単である。併しその内容は簡単どころではない。一体日本人は生きるといふことを知つてゐるだらうか。……学校といふものを離れて職業にあり附くと、その職業を為し遂げてしま

はうとする。その先には生活があると思ふのである。そしてその先には生活はないのである。」と、真に生きる事の意味の欠如を嘆き、更に、「現在は過去と未来との間に劃した一線である。此線の上に生活がなくでは、生活はどこにもないのである。」と、現在の生活の充実を希求する天啓となって現われて来るのである。即ち、小泉純一が如何にして、自己の青春の内実を獲得し得るかという事にあつたのである。しかし、不幸にして坂井夫人と単なる肉の閱歷のみに終止してしまふ。純一自身「一体こんな閱歷が生活であろうか。どうもさうは思はれない。真の充実した生活では慥にない。」という歎きとなつてはね返ってくる。この日々の充足こそ、主人公に托した作者の祈りにも似た願望であつたろう。また『カズイスタカ』の中で、花房医師の「始終何か更にしたい事、する筈の事があるやうに思つてゐる。併しそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。」と、何物かに駆られて、「目前の事を好い加減に済ませて」、しかも「遠い向うに或物を望」みながらも、しかも把めずにいらだつてゐる姿と對象的に、「父は詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾註してゐる」と尊敬の目でながめてゐる。更に『妄想』に於いても、「自然科学のうちで最も自然科学らしい医学をしてゐて、exactな学問といふことを性命にしてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生といふものを考へる。自分のしてゐる事がその生の内容を充たすに足るかどうかと思ふ。生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齟齬してゐる。」と云う自己反省は、「自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。」とまで言つてゐる。しかも、

「一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい」と云い、足ることを知らない「永遠なる不平家」と断じる時、主人公に托した日々の充足という願ひは強烈であつたろうと思われる。日の要求に安住することが出来ない故に、『仮面』の杉村博士のように「家畜の群の風俗を離れて、意志を強くして、貴族的に、高尚に、寂しい高い処に身を置きたいのだ。その高尚な人物は仮面を被つてゐる。」と、孤高な精神を持つて、仮面を被つて生きなければならなかつたのである。それ故に、日々の充実を希求する所に、鷗外文学の原点を定めたい。学問の上で折衷主義を否定し、進化論的思想は『沈黙の塔』『食堂』『フラスチエス』等に見られる如く、当時としては卓越した見解を示しながらも、社会秩序の維持のために皇室の安泰と、歴史發展の必然性とを調和しようと苦慮する結果人かのやうにVの哲学を導入し、結局折衷的態度を取らざるを得なかつた鷗外。官界の塵芥にまみえていた鷗外。しかも、明治から大正期へかけて絶対主義國家の演ずるドラマの中で、一役も二役も買わざるを得なかつた鷗外。陸軍増師団問題、南北正濶論問題等における微妙な立場。どれを取つてみても、どこかぎこちない姿を見出さざるを得なかつたであろうと思われる。それ故に生きる事の内実の獲得は急務であつたろう。「全幅の精神」を以て、全身全靈を打込んで生き抜いた人々に共感と羨望を覚えたと考へても大過なからう。この意味合から津下四郎左衛門を見据えることは容易であらうし、『羽鳥千尋』や『天寵』にも共通してこよう。医術開業試験に志ざしてから、逆境の中で病と闘いながらも、黙々と学問に励み、四年めに後期実地試験だけを残して病死した二四歳の羽鳥千尋、苦境にあつても絵心一すじに進み、不死身に

なったような気ですぐれた裸婦を描く若き画学生M(宮芳平)のわきめもふらず、目的に向かつて進む真摯な態度に引きつけられたのであろう。同じく『二人の友』のF君(福岡博)と安国寺さん(住職・玉水俊斌)もそうであろう。そこには単なる同情などない。あたたかな鷗外の目が、愛情が感じられる。

とまれ、『津下四郎左衛門』は新らしい小説としてのスタイルの発見、並びに鷗外の心情と緊密に関わっている点で注目し、評価してよい作品であると考えている。

(注)

- 1 『山房札記』(大正八年十二月十八日、春陽堂発行)は、鷗外の史伝小説を収録したものである。因みに目次を一瞥すると、『栗山大膳』『榎原品』『都甲太兵衛』『寿阿弥の手紙』『鈴木藤吉郎』『細木香以』『津下四郎左衛門』が収録されている。
- 2 『津下四郎左衛門』執筆のため知友に問合せた事項に関する書簡、「中央公論」発表が媒介となって寄せられた書簡、公文書の写し、雑誌の切抜き等を鷗外がまとめたもの。表紙には「鷗外先生自轉／津下文書」と森潤三郎氏の筆跡で書かれている。天理図書館所蔵。
- 3 『寒山拾得』の縁起に於いて、「子供にした話を殆く其儘書いた。いつもと違って、一冊の参考書をも見ずに書いたのである。」と、作品成立事情について自ら書いている作品でさえ『寒山子詩集序』が原史料として用いられたと言われている。東京大学所蔵の鷗外文庫目録には秋日陰『寒山詩蘭提起聞』が載っている所から考えて、これらの本が『寒山拾得』の執筆にあずかったのではないだろうか。しかし、理在原本が不明なので断言することはできないが。
- 4 日記にみえる正高氏から托された「書類」は現在不明。小説中に「父の足跡を印した土地を悉く踏破した。私は父を知っていた人、又は父の事を聞いたことのある人があると、遠近を問はず訪問して話を聞いた。」とあるから、その記録であろうことは想像できるのだが。

5 横井時雄編『小楠遺稿』(明治二十二年十一月廿五月初版、明治三十一年五月十日再版、民友社発行) 鷗外蔵書の押印がある。東京大学鷗外文庫所蔵。

6 村田氏寿、佐々木千寿編『続再夢紀事』(侯爵松平家蔵版)は「文久二年八月二十七日ヨリ慶応三年九月末ニ至ル迄越前福井藩ノ根本史料ヲ基礎トシテ」成ったものである。

7 私のみた資料は『改訂肥後藩国事史料』(巻一～巻十、昭和七年九月三日、侯爵・細川家纂所)であるが、その「緒言」によると、「此史料編纂の事情は、夙に高原淳次郎、武藤巖男等をして、其端を發せしめ、繼て小橋元雄をして、之を編せしむ。大正二年七月書成る。総て三十七卷、肥後藩国事史料、並に能本藩国事史料と称す云云」とある。これによると、鷗外は大正二年版の『肥後藩国事史料』ならば閲覧する機会があったと思われる。

8 「三宅方の裏には」は『山房札記』では「左近方の裏には」と改められている。後の「三宅」を「左近」に改めている所をみれば、当然「左近」が正しく、「中央公論」に手を入れる時、ここだけ見落してしまっただけであらう。

9 『森鷗外全集』第四卷(昭和三十四年五月三十日、筑摩書房刊)の解説の三九七頁による。

(附記)

1 本論考は「日本近代文学会秋季大会」(昭和四十年十月二三日、於東京大学)に於いて『津下四郎左衛門』論」と題して研究発表したものに、再考を加え、整理したものである。

2 東京大学所蔵の鷗外文庫閲覧に際し、藤堂明保氏、尾上兼英氏、船津富彦氏、天理大学天理図書館所蔵の鷗外文庫閲覧に際しては、富永牧太氏、木村三四吾氏、石崎正雄氏の配慮を賜わり、研究発表に際しては稲垣達郎先生の御指導を受けたことを合せ記して、ここに感謝の意を表したい。

—一九七一、二、二八—